

第95回 みんなで作る音楽会 報告

日時：1月14日 水曜日 13:15から16:00

場所：公民館114室

参加者：岡田、北風、久我、小林猛、塩路弘子、下中、庄司、清水、住本、田中、高塚、高濱、兵東、榎本、松山、光長、三村、山川恵子、安居院（記）計19名

モーリス・ラヴェル特集

今回は、昨年生誕150年を迎えたモーリス・ラヴェルを特集します。映画「ボレロ 永遠の旋律」で誕生の秘密に迫り、日本の演奏家によるラヴェルの名曲を聴いてみます。

1. 角野隼人 亡き王女のためのパヴァーヌ ボレロ 13:15-13:25

まずは、ラヴェルのピアノ曲を聞いた。角野隼人の昨年2月サントリーホールでの演奏。アップライトピアノに仕掛けをして、音色の違いを楽しむという仕掛け。

2. 服部百音 Vn・亀井聖矢 Pi チガーヌ 13:25-13:35

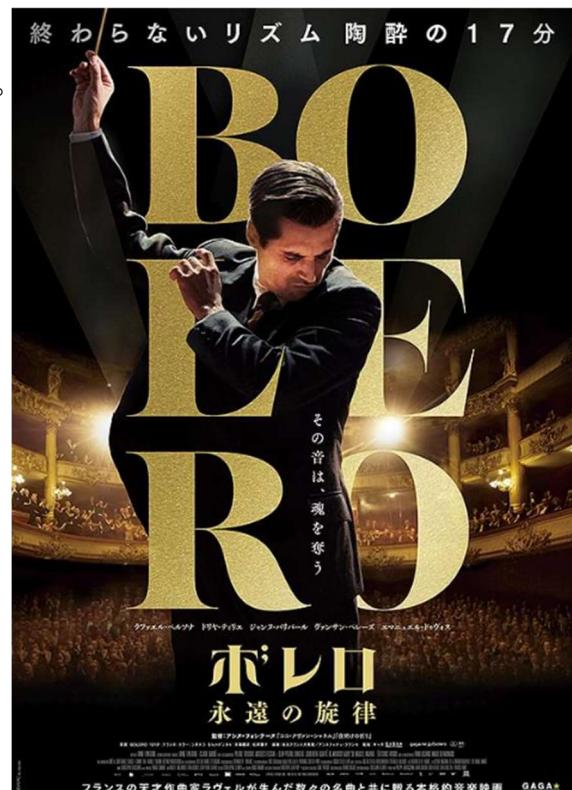
ハンガリー、ロマの音楽をもとにラベルが作曲。超絶技巧が素晴らしい。服部百音はラベルは意地悪な仕掛けをしていると評価。それを楽しめる演者も素敵。

3. 映画「ボレロ 永遠の旋律」 2024年 フランス 13:35-15:35

フランスの作曲家ラベルによる不朽の名曲「ボレロ」の誕生秘話を描いた音楽映画。1928年、パリ。スランプに苦しむモーリス・ラベルは、ダンサーのイダ・ルビンシュタインからバレエの音楽を依頼される。彼は失ったひらめきを追い求めるかのように自身の過去に思いを馳せながら、試行錯誤の日々を経てついに傑作「ボレロ」を完成させる。しかし自身のすべてを注ぎ込んで作り上げたこの曲に、彼の人生は侵食されていく。

ラファエル・ペルソナ：ラベル、ラベルの生涯にわたるミューズのミシア：ドリア・ティリエ、ダンサーのイダ：ジャンヌ・バリバールが演じた。監督はアンヌ・フォンテーヌ。

ブリュッセル・フィルハーモニー管弦楽団の演奏による「ボレロ」に加え、ヨーロッパを代表するピアニストの1人であるアレクサンドル・タローがラベルの名曲の数々を演奏した。



感想；清藤秀人（きよとう・ひでと）さんの文章

ある意味、クラシック音楽の枠を超えたこの名曲が、誰によって、どう作られたかを紐解くのが、作曲家、モーリス・ラヴェルの人生にフォーカスした本作。1927年、ロシア人バレリーナ、イダ・ルビンシュタインから新作バレエのための曲を依頼されたラヴェルが、後世に残る傑作を作曲するまでの約3ヶ月間、物語は主にラヴェルと関わった女性たちとの記憶を繋ぎながら進んでいく。音に敏感すぎて演奏に集中できず、ピアノコンテストに落選し続ける息子の才能を信じ続けた母親。ラヴェルに新作バレエの作曲を託すことでバレリーナとしての限界を越えようとするイダ。ラヴェルにとってのミューズであり、叶わぬ愛を捧げ続けたミシア・セルト。中でも、ラヴェルとミシアの関係はプラトニックに見えながら、添え難い者同士を深い部分で融合させる音楽の可能性を感じさせる。2人の間に漂う深淵でエロチックなムードを見逃して欲しくない。

印象的な場面が幾つかある。ラヴェルは窓際に佇むミシアが扇子を開けたり閉じたりする音と反復されるリズムに鋭く反応する。ラヴェル所縁の地、スペインに伝わるボレロの原型と言われる舞踏曲にインスピアイされる。それを少しずつピアノで演奏しながら、楽譜に置き換えていく。雨垂れ式に描かれるこれらのエピソードは、名曲「ボレロ」が偶然の閃きで生まれたのではなく、作曲家が人生の断片を苦しみながら、少しずつ具現化した結果の産物だということを伝えていて、なるほどと思う。

ラヴェルにとって「ボレロ」は、まさに記憶をかき集めた人生そのものだったのだ。「ボレロ」とラヴェルの生涯が見事にリンクする映画の幕切れは運命的で、同時に感動的だ。

「ココ・アヴァン・シャネル」(2009年)や、第二次大戦末期のポーランドで起きた修道女たちの悲劇を描いた「夜明けの祈り」(2016年)で知られるアンヌ・フォンテーヌ監督は、ラヴェルの実家、ル・ベルヴェーデルでの撮影を熱望し、許諾を取り付けたのだと。史実と想像のバランスに配慮した本作は、“アラン・ドロンの再来”と呼ばれるラヴェル役のラファエル・ペルソナの美しさとも相まって、端正で品格がある人物伝に仕上がっている。

4. ラヴェル：組曲「マ・メール・ロワ」

昨年生誕150年を迎えた、“オーケストラの魔術師”とも呼ばれるラヴェルの組曲「マ・メール・ロワ」を特集。もともとピアノ連弾曲として作曲し、ラヴェル自身が編曲した管弦楽版について、その特徴を紐解きながら、東京シティ・フィルの名演をお届けする。

色彩豊かに拡がる音の世界を堪能しよう！

感想；ラベルの曲として有名な作品は、今日取り上げたものが有名どころだ。

でも、こんなにかわいい子供向けに作られた作品もあるのだ。オーケストラの響きを駆使した作品は、美しいとしか言いようがない。

15:35-15:55



以上